

「東日本大震災から学ぶフィールドワーク」特集号

8月21・22日に市教組と市教組青年部共催で東日本大震災から学ぶフィールドワーク(以下、フィールドワークはFWと表記します)を開催しました。1日目は仙台市の荒浜小学校、2日目は石巻市の門脇小学校と大川小学校を見学しました。今回のFWを通して、防災・減災教育の大切さをあらためて痛感しました。

以下に、参加者からの感想を掲載します。(紙面の都合上、若干、編集させていただいていることをご了承ください。)



大川小学校

◇ 1日目は荒浜小学校にタクシーで向かいました。津波によって壊れている外壁はありましたが、高くて頑丈な建物は荒浜地区にはこの小学校だけでした。当時、ここに避難することができた320名の方々が全員救助されたことに安堵せずにはいませんでした。一方、その地区周辺では、住民の3分の1以上の方が亡くなっておられ、いわゆる震災弱者とされる方々なのかなと思って胸が痛みました。帰りのタクシーの運転手さんは、当時は東京で単身赴任だったため無事だったとか。家が高台にあったために全員無事だったというご家族とは、当日に無事が確認できた約半年ほど連絡が取れなかったとのことで、その津波の凄まじさを感じました。

2日目は、学校にいた児童と教職員が全員助かった門脇小学校を先に、その後多くの犠牲者が出てしまった大川小学校に、という順番だったことが私にはよい学びとなりました。私たちは、日頃の避難訓練で、それぞれが精一杯に子どもたちの安全を考えているつもりです。しかしながら、使いたくない言葉ですが、気の緩みが出たり、ほんの少しのボタンの掛け違いがあったりして、そんなつもりではなかったのに、という事態にいつなるとも限りません。自分が引率しながら、目の前で子どもたちが…という想像は、それだけで胸が張り裂けそうになります。子どもたちの学びと命を守るために私たちのしなければならぬことの多さには、愕然とさせますが、自分の考え得ることから真摯に取り組んでいきたいと思えます。(TG)

◇ 今回のFWでは、あまりにも衝撃が大きすぎて、何度も言葉を失いました。3.11のことは、テレビや研修等で何回も話を伺ったり映像も見ていたこともあり、正直、現地での人の想いに触れて感じることはあっても、場所を見て何か特別な思いを馳せることはないだろうな～、となんだか軽く思っている自分がいました。

しかし、「津波到達点」と書かれた場所の高さが…そこに立った時見渡す景色が…今まで見てきた映像を頭の中でそこに重ねたとき、呆然としました。

感じたこと、伝えたいことがたくさんありすぎて、この二日間のことを書き切ることはできませんが、1つだけ。戦争と同じく、被災された方たちは「二度と自分と同じような思いをしてほしくない・見てほしくない」ということを強く願っておられるということです。私たちは、南海トラフ巨大地震というものを必ず経験するでしょう。その時に、被災者の方たちが残してくださり、紡いでくださっている想いをしっかり生かすことが、亡くなられた方・被災した方たちの想いに応えることなのだと思えていただきました。

校内研修や、大阪市の研修などでは決して体験できない貴重な体験を今年もさせていただき、本当に良かったと思っています。ぜひこの輪が広がり、今後もこのようなFW研修が続いていくといいなと思いました。青年部をはじめ、企画実行して下さったみなさん、本当にありがとうございました。(HT)

◇ このFWで最も印象深かった場所は、石巻市立大川小学校の震災遺構です。児童108人中74人、教職員10人が津波の犠牲になりました。

河口から4キロ離れているこの現場において、一体何が起きたのか、この悲劇を避ける事ができなかったのか、様々な想いが頭の中を巡りました。

震災当時、現場にいた教職員もみな児童の安全を確保しようと思っていたはずですが、ただ、そこにあった情報・マニュアルが実際の津波の規模を想定できていなかったのだと思います。

今後、私たちが同じような状況下に置かれた時、どのような判断ができるのか、子どもたちを守る正しい行動がとれるのか、しっかりと見つめ直していきます。それが、大川小学校を訪ねた意義だと思います。(MR)

◇ 防災等の教員研修を受けてきていましたが、今回、実際に被災地の震災遺構を訪れることによって、災害に備えての対策、起きたときの行動について等、今まで以上に実感し考えるきっかけとなりました。自宅がある地域のハザードマップを見ていなかったり、防災グッズの用意、どこへ避難するかも家族と話し合ったりしていませんでした。先日の南海トラフ地震臨時情報が出て、「水だけでも確保しておこうか」という意識でした。しかし、大川小学校を訪れたことによって意識が変わりました。

大川小学校は、川の上流付近、また、山を超えた向こうに海があるという位置にあり、一部の人は、(この付近まで、津波は来ないだろう)という認識で、津波がきたときの避難場所の確認を失念していたという記事を読みました。私の自宅近くに海はないので、津波はこないだろうと思っていました。しかし、3つの川に囲まれた場所にあります。津波による川の逆流や氾濫がある恐れがあることに気付かされました。帰宅した直後、FWで学んだことを伝え、どこに逃げるかを家族と確認しました。

FWの2日後の地域の自治会の話し合いで、防災についての話が出たと聞きました。垂直避難し、津波到達まで時間があり避難場所までの安全が確保できれば、地区ごとに集まり避難する方向を伝えられました。しかし、80代後半の祖母が家で1人だった場合、足が悪く避難場所まで歩いていけるのかと…。地域の助けの人が来るまで、必ず垂直避難をしておくように伝えました。しかし、垂直避難したからといって安全が確保されたわけではない…。家屋の倒壊、火災旋風、門脇小学校のように津波火災に巻き込まれることもあります。震災遺構の見学で「自宅や職場の周りの地理をしっかりと把握しておくこと」「2次被害、3次被害の可能性も想定し、それぞれの避難ルートやその時の行動を考えておくこと」「大丈夫だろうと油断をしないこと」を学びました。

また、地震の避難訓練は学校内で起きたと想定して行っていました。しかし、児童が下校していたら…。門脇小学校の話聞いて、下校した後、家には児童1人だけや、兄弟しかいなかった時、どう避難するかまで教えられていなかったのかなと感じました。もちろん、児童の家族に教えられているかもしれませんが、全員がそうとは限らないはずです。東日本大震災当時、門脇小学

校では3年生以上は学校にいましたが、低学年はすでに下校していたようです。家族と学校に避難した児童もいましたが、1人もしくは兄弟のみだった児童の中には、命を落としてしまった子どももいました。児童だけの時に地震が起きた場合の命を守る行動も伝える必要があるとともに、保護者にも自分の子どもが命を守る行動ができるように話して欲しいことを伝えていかなければならないと感じました。(OG)



◇ 震災があったことが記憶から薄れつつあった中で、実際に現地に赴き見ることで感じることは大きかったです。

当時、自分は車に乗っていて橋が揺れてるのかな？と感じた揺れだったのが家に帰ると被災を伝える番組ばかりでかなりのショックだったことを思い出しました。沢山の人が亡くなったことや、帰る場所や思い出の場所が跡かたもなく流されたことを思うと胸が痛みました。

今回、遺構を見学して思ったことは、普段から災害が起きた時に何をするか、何が使えるかという視点で学校を見るのが大事だと思いました。いずれ起きる大地震の時に、目の前の子どもたちを守るように用意しておけばよかったという後悔ではなく、用意したけどいらなかったな！という振り返りができるようにしたいと思いました。(TK)



現地の方から説明を受ける

◇ 私たちは今回のFWで、仙台市の荒浜小学校、石巻市の門脇小学校・大川小学校の震災遺構を訪ねた。

荒浜小学校は、4階建ての上に屋上がある校舎だった。震災のときは2階まで津波が押し寄せ、3階・4階に避難し、屋上からヘリコプターで救出された人もいて、学校にいた児童・教職員・住民は全員助かった。

門脇小学校は、津波は1階までであったが、2階以上は津波によって押し流されてきた火災家屋によって小学校も火災が起こり、ほぼ全焼の状態、児童机は鉄の部分だけが残っていた。この小学校では地震が起きてすぐに裏山の公園に避難し、全員が無事であった。

大川小学校は海岸から4キロメートルも離れており、訪れた三つの小学校の中では最も海岸から離れている。そんなに高い津波がくることは想定されていなかったのかもしれない。学校が地域の避難場所にもなっていた。にもかかわらず、すぐ横を流れる北上川を遡ってきた津波と海からきた津波が渦をまき、2階建ての校舎の高さをはるかに超える裏山の途中まで到達していた。避難が遅れ、多くの命が失われた。

3つの小学校は立地も校舎も違うが、やはり、どれだけの命が失われたかは、はっきりと残る。「大川小学校はなぜ山へ避難させなかったのか。」という声は当然出てくるし、保護者から訴訟も起こされている。大川小学校横の資料館に書かれていた震災後の検証を読んだが、やはり、避難計画が不十分であったという記述であった。学校に勤務するものとして心が痛くなった。

神戸の震災以降、私たちは、地震や津波、洪水を想定した避難訓練をしてきたが、ここがダメなら、次はここへという想定も必要ではないかと思った。防災物資もすべてを同じ場所に置いておいていいのかも考える必要がある。教室で靴を履きたがらない子どもがときどきいるが、それは避難のとき、とても危ない。そんなことも考えておかなければならないと思った。また、学校は地域の防災の拠点であることも改めて感じた。

(SG)

◇ 今回の学習ツアーで被災地をまわりながら、震災当時のことを想像しました。自然の恩恵を受けて生きている私たちは、自然の脅威にさらされることもあることを改めて感じました。

震災遺構を目の当たりにして、地震や津波の恐ろしさを感じました。そこで守られた命、そこで失われた命があるということ。

もちろん、誰もが助けたい、助かりたいと思っただけで、どんな行動をするのが正しかったのかと考えると、自分が子どもたちという時に地震がきたらどう動いたらよいかと不安になりました。

でも、不安になるだけで終わるのではなく、この震災で得た教訓を忘れずに、きちんと備えをするべきだと思っています。「正しく知って正しく恐れながら」何よりも大切な「命を守る」ことについて子どもたちと話し合ってみます。私も思いを「紡ぐ」一人になりたいです。本当にありがとうございました。(KN)

東日本大震災から13年が経ちました。当時は6時間目の授業中、大阪市内でも「ぬるっ」とした大きな揺れがありました。子どもたちの下校後、職員室でテレビを見ると、東北地方で大きく揺れているたくさんの映像、なによりも津波により車が、建物がいとも簡単に流されている映像に恐怖したことが今でも忘れられません。そして、今回のFWに参加させてもらいました。一日目は仙台の荒浜小学校に行きました、自動車が校舎の中に流された写真とその形跡が残っていました。二日目の石巻の門脇小学校では津波と津波火災の跡を中心にととても丁寧なお話とともに見学をしました。そして、大川小学校では海から4キロほど離れているにもかかわらず、津波が北上川を上がってたくさんの方をのみこんでしまいました、そのすさまじい様子が残された校舎の被害から伝わってきました。

この3つの小学校跡の見学にいき、それぞれの状況、それぞれの被害について考えさせられました。もし、自分が当時その場所にいたらどうしただろう、適切な(適切というのとは結果論かもしれませんが)判断ができるのだろうかという思いばかりがめぐっていました。そして、13年前の大阪での対応すらも自分で判断したことが適切だったのだろうか…と思いました。このことを教訓として考えてほしいというにはあまりにもつらいのですが、でもやはりみんなと話し合い、考えることはとても必要だとあらためて感じることができました。(TN)

◇ 震災から今日に至るまで、現地を訪れたいという思いを抱えながらも、その機会を得られずにいました。当時テレビで目にした津波の映像は今でも鮮明に記憶に残っていますが、自分の住んでいる地域が違うことで、どこか他人事のように感じていた部分があったのかもしれない。しかし、大阪北部地震の際にボランティアとして参加した経験を通じて、被災地の現状を少しは理解したつもりでいました。

今回のFWで訪れた震災遺構は、そのような認識を大きく覆すものでした。特に津波によって大きく変形した消防車の姿を目の当たりにし、その破壊力と被害の大きさに息をのみました。印象深かったのは、「燃えた家が津波に流され、さらに延焼し、一帯が炎の海と化した」という事実です。下の階から火が迫る中、校舎の屋上に避難した方々が教壇を橋代わりにして丘へと逃れた話を聞いたとき、極限の状況下でも冷静に最適な判断を下した教職員の方々に深い敬意を抱きました。同時に、自分がもしその場にいたなら同じ決断ができたかどうかと考えました。

このFWを通じて、学校で児童の命を預かる責任の重さを改めて感じるとともに、地震は他の災害に比べても予測が困難であり、津波や火災、土砂崩れ、地盤沈下といった連鎖的な災害を引き起こす危険性を再認識しました。(NG)



大津波に飲み込まれた沿岸部 (2011.3.11)

